

### 国立沖縄工業高等専門学校でのアンケート内容

国立沖縄工業高等専門学校生の3年生に対して、以下のようなアンケートを2007年4月に実施した。

問：「2025年の世の中（沖縄）はどのようなになっているか（なって欲しいか）」

産業創造セミナーの受講生、110人が回答した結果が、以下の表のようになる。なお、アンケートは、1人で重複したコメントを作成した学生もいたため、アンケートの回答を合計すると、回答者数との違いが出るので、注意していただきたい。

表：アンケート結果一覧

環境	I T	産業発展	豊かな暮らし	平和
64	13	9	22	21
観光	科学技術	医療・健康	教育	その他
4	35	9	2	7

一部アンケートコメントを抜粋すると、以下のようなコメントが寄せられた。

- ・ 科学技術が今よりもっと進歩していて、映像などが3Dの立体映像だったり、ASIMOを超えるロボットが普通に街中にいたり、宇宙に行くことが容易になっていたりする世の中になっていたらと、思います。
- ・ ガゾリン以外のエネルギーで走る車や家庭でソーラー発電などが主力となり、地球温暖化が解消してくる。またそのことにより珊瑚が増えるなどで海が今より綺麗になって、観光や産業が発展し就職率があがって、活気のある世の中になって欲しいと思う。
- ・ 多くのベンチャー企業が立ち上がっては消えていく中、いくつかは事業を成功させる。学生たちはそれを目標に掲げ、起業する人口は減らない。そしていくつもの新しい技術や新しいビジネスが誕生していく。
- ・ 以心伝心、テレパシーのような対人間通信装置(制御可能)
- ・ 2025年には映像技術が発達して今では考えられないぐらい素晴らしい映像作品が上映されていると思います。
- ・ 世界で一番平和な世になって欲しいと願う。
- ・ 世界が「国」という個々のものでなく、一つとなっていて欲しいです。そうなれば、戦争も起きず、核兵器なども必要なくなり、平和な世界になると思うからです。

所感：

アンケートを実施した、17歳の彼らは2025年には、35歳になり、2030年には、40歳である。これからの沖縄を担っていくのは、若い彼らであり、彼らが活躍できる場、環境を整えるのが、我々の役目である。

彼らは、今後の沖縄の自立型経済の中核となる人財であり、彼らが望む沖縄の未来図は、環境に配慮した地域づくり、街づくりを行い、科学技術やI Tの発展により、格差の無い、平和で豊かな暮らしを望むものであった。

彼らだけではなく、高い志を持ち、大きな夢に向かって、頑張っている若者は、まさしく、光り輝くダイヤモンドの原石であり、沖縄の宝である。

## 2030年のある一日（沖縄におけるIT人材育成への提言より抜粋）

本提言は、検討会での議論、沖縄工業高等専門学校生徒のアンケート回答、沖縄県「情報通信関連分野の人材育成に関する基本方針<sup>1</sup>」、総務省の「IT新改革戦略政策パッケージ<sup>2</sup>」及び「重点計画-2007<sup>3</sup>」、内閣府『長期戦略指針「イノベーション25」<sup>4</sup>』を参考にしながら、約20年後の沖縄の情報通信関連における人材育成及び家庭の風景をイメージするものとして、ストーリーテリング手法にてとりまとめたものである。

### （家族構成）

祖父：勇大(ユウダイ)（82歳） 元土木建築業経営者。10年前に経営権を、土木工学博士号を持つ若手従業員に譲渡。その後、インターネット大学で1年間、ITと環境テクノロジー講座を受講。かつての土木建築技能と最新のIT及び科学技術動向に関する知識をベースに、現在は、週8時間程度、地域の小・中学校で講義を行っている。

祖母：陽子(ヨウコ)（80歳） 元介護福祉士として老人ホームに勤めていた。ワーキングシェアにて10年間勤務し、10年前に退職。その後、趣味の三味線や琉球舞踊を楽しむ傍ら、若者達が中心で運営している地域で各種イベントを実行するボランティアサークル活動に熱心に参加している。

父：大地(ダチ)（56歳） 大学卒業後、公務員となったが、社会人枠で修士及び博士課程を修了し、同分野での研究成果を生かすべく20年前に退職し、大学の同期と大学発ベンチャーとして企業を設立。グローバル市場への展開により、5年間で同事業は失敗。その後、彼の技術を評価する資金供給者の出現と過去の失敗から得た教訓を生かす彼の努力もあって、新たな海洋GIS関連のベンチャー企業を立ち上げ、現在急成長中。

母：秋子(アキコ)（54歳） ファッション関係の会社に在職していた25年前に、父大地と結婚。3年後に長男天人、4年後に長女美来、その2年後に太陽を出産するが、出産・育児支援制度活用と会社のテレワーク制度活用により、現在まで勤続中。

長男：天人(テン)（20歳） 現在、飛び級にて大学4年生。来年の大学院進学に関して思案中。

長女：美来(ミキ)（16歳） 昨年より、交換留学生制度を活用して上海の高校に留学中。

次男：太陽(テイ)（14歳） 地元のインターナショナルスクール（K12）小中一貫学校に在学。

家庭用ロボット：ユイ（5歳）。小学生くらいの大きさだが、ホームネットワーク、地域ネットワークといつも連絡を取り合うことが可能である。会話能力も持ち、外国語への変換も自在に行なう。名付け親は長男天人で、名前の由来は「ユイマール」。

1 沖縄 e-island 宣言: <http://www.pref.okinawa.jp/ipo/e-island/top.html>

2 IT 新改革戦略政策パッケージ: [www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/kettei/070405honbun.pdf](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/kettei/070405honbun.pdf)

3 重点計画-2007: <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/kettei/070726honbun.pdf>

4 長期戦略指針「イノベーション25」: <http://www.kantei.go.jp/jp/innovation/saishu/070525/saishu.pdf>

(2030年1月10日)

06:30 .....

勇大、陽子が起床。

沖縄の亜熱帯生物資源の遺伝子情報が全て解析され、沖縄の伝承医療による植物が快適な眠りと体内浄化を促しており、心地よい目覚めである。

目覚めてから、自分たちの部屋の3次元立体ディスプレイ（フォログラフィック表示）で「今日の健康状態」を見る。睡眠時を含め家庭内での生活状態から簡単な健康チェックがコンピュータで行われているのだ。画面には、各種データが示された後「今日も良好です」の表示がされている。

コンピュータには個人の遺伝子情報も入っているので、体調不良で投薬が必要な場合には、初期段階で個人に合った薬を指示してくれるので安心だ。このシステムのおかげで最近では滅多にお世話にならないが、少し症状が重かったり、どうしても医師に相談したい場合には、専門医の診断をTV電話風に受ける事も出来る。

沖縄県と市町村が整備した地域高速インターネット整備網により、医師側と家庭側の諸データも両者のコンピュータがつながっているので、極めて的確かつ信頼できる診断となっている。

07:00 .....

大地、秋子、天人らも起きてきて、家族全員が居間で朝の団欒のひと時。

壁には103インチの大型ディスプレイ。分割画面と専用ヘッドホンで各人が好きな映像（TV、インターネット、等）を見る事が可能だが、今日は美来が留学している上海のTV放送を皆で見ながら談笑している。

また、今日の太陽の給食の献立も見ることができ、秋子は太陽の栄養のバランスを考えて、朝食は、沖縄の契約生産農家から電子商取引によりビタミンCの豊富なゴーヤージュースを出している。

さらに、大地は、地理情報システム（GIS）とピンポイントの天気予報により、18時から30分間、オフィス周辺500mで雨が降るとの情報を得て、出勤した。

08:00 .....

大地が沖縄科学技術大学院大学のリサーチパークへ出勤。

沖縄では、車の移動よりも公共交通機関の発達により、バス、モノレール、軽量軌道交通（LRT）が主要交通になった。大地もバス、LRTを利用して自宅からオフィスに向かう。テレワーク制度の普及、フレックスタイム制の普及等により、通勤に伴う過密な人の移動がなくなったおかげで、車の渋滞も無くなった。大地の会社の社員の半分は自宅で仕事をしている。かつて勤めていた地方自治体の職員は、5割がテレワーク対象者となっている。

「かつての通勤渋滞がまるで嘘のようだ」そんな事を考えながら、昔の新聞を読むように携帯フレキシブル・ディスプレイに映し出されるニュースを読む。

ニュースは、東南アジアの豪雨の状況を伝えている。洪水、土砂崩れなどが発生してい

るようだが、沖縄の大学から技術移転したIT技術により、危険地域に張り巡らされたセンサネットワークと住民への緊急情報システムによって、十分な時間的余裕をもって避難することができるので、犠牲者はゼロだという。

沖縄でも、台風や土砂災害等の自然災害が発生するが、ここ10年以内に建てられた建造物では、倒壊したものはないという。ちなみに、伊手家は、外見は沖縄の伝統的な赤瓦屋根であるが、長期耐用可能な技術により作られた住宅で200年も持つと言われている。地震などの自然災害にも強く、建物の倒壊実験では、震度7でも倒壊しない。地震の際にも、地震の揺れを自然に察知し、各種インフラや家電製品などがネットワーク化して二次災害を防止するシステムが作動するので、安心だ。

バスは、太陽光発電、バッテリー充電型の電気自動車だ。今では公共交通機関としてのバスはすべてこのタイプか燃料電池車になっている。

また、最近、人工光合成技術などにより、CO<sub>2</sub>をエネルギー源として走る自動車が開発されて、実用化が期待されている。

道路も極めてスムーズな流れ。全国的には未整備なところも一部残されているらしいが、沖縄では、全国に先駆けてのモデル地域としてITS（高度道路交通システム）が整備されており、5年連続で交通事故ゼロを達成している。

08:30 .....

中学校の太陽の授業。

沖縄では、全ての学校で日本語と英語、もしくは中国語のバイリンガルスクールとなり、全ての授業において、ITが活用されている。教育用のコンテンツは、IT教育センターにて一元管理され、そこから全てダウンロードできるようになっている。

全ての教員もITを活用しながら、授業が行なえるようになっており、島嶼県である沖縄においては、遠隔でも授業が行なえるITスキルは必須である。

太陽の同級生の半数が外国人であるため、担任の先生は得意とする、動画を活用した発展型IT教育を活用し、日本語、英語、中国語の3カ国同時のコンテンツを提供しながら、授業を行なっている。

また、健全なネットワーク社会を築いていくため、モラルの醸成についても配慮しており、生徒同士で考えるワークショップ形式の道徳教育については、朝と夕方のホームルームにおいて、わかりやすく教育している。

09:30 .....

大学の天人の講義。

沖縄にあった全ての大学が、琉球アジア連合大学となり、海外からの留学生も積極的に受け入れ、飛び級、2科目専攻（ダブルメジャー）が標準となった。天人もITとバイオを融合したバイオインフォマティクスを専攻していて、3年間で大学を卒業予定である。

飛び級は、大学内にて全体講義を行なう必修科目と、インターネット上にて行なう選択科目を、効率よく自分自身のシラバスとして受講した結果である。

大学では、入学当時から個人向けに太陽光発電の標準化されたPCが配布され、大学構内

全てにおいて、ユビキタスによる高速ネットワーク網が構築され、予習、復習、レポート・課題提出等の全てを行なうことができるようになっていく。

天人は、バイオインフォマティクスを専攻しているが、大学において最も重要視している強化は、「人間力」の向上である。プログラミング技術やITスキルのセンス、プロジェクトマネジメント、イノベティブマネジメント等の講義も、産業界から求められているが、コミュニケーション能力やビジネスマインドの醸成を図るために、改めて「人間力」が重要と認識されたからである。

10:00.....

祖父の勇大が、電気自転車で出勤。

勇大は、元々、海人であり、自然に常に感謝の念を示し、生活していた。「20年前に比べて、格段に排気ガスが減り、沿道に緑が多くなり、まるで自分自身の子供の頃のように自然が戻っている」と、勇大は通勤しながら感じるのだった。自宅から10キロ圏内ならば、勇大の年齢でも楽々通勤可能である。

電池技術の進歩で電気自転車の機能が進化したことと、自転車専用レーンが作られたことで、自転車通勤は大ブームになっている。地球にやさしく、健康にいいのが人気の秘密だと言われている。

また、自動車と道路の高度情報化・ネットワーク化の進展により、衝突の自動回避や自動運転が普及しており、自転車で走行する際にひやっとするようなこともなくなった。

ちなみに、電池技術の進歩は、電気自動車の普及や各種新型携帯機器の実現等をもたらしている。日本はこの分野で世界一の技術力を持ち、世界にたくさんの製品やサービスを提供している。

12:30.....

大学のカフェテラスで、天人が友人らと昼食をとっている。

10人近い仲間の内、沖縄出身は天人を入れて2人だけで、他は日本本土、欧米、アジア、中南米、中東、アフリカからの留学生。大学院まで含めると、天人の通っている大学は、教員も学生も沖縄人は約3分の1である。

外国の若者に人気なのは、環境テクノロジーだそうだ。沖縄で学んだ知識を活かして、母国の環境経済の実現に貢献しているケースが多い。

今日の話は、天人の留学問題。天人は高校時代にアメリカに留学しているが、大学院を欧州、米国、中国のどこにするかで悩んでおり、各自のPCを共有した画面でどの大学が良いかを議論している。

また、20年前に県内のITベンチャー企業経営者が取り組み始めた米国シリコンバレーへのインターンシップが年間200人を超え、天人はそのインターンシップを活用して、半年間、米国にてインターンシップも行なうことも考えている。

1:30 .....

#### 長女美来の上海での高校の様子

美来が通う上海の高校では、全世界から学生を受け入れており、沖縄からも美来を含めて、20人が留学生として勉強している。これは、道州制導入により、沖縄にも時差が導入されたため、上海との時差は無くなり、また、航空機の発達により沖縄—上海間が飛行機で30分という時間で移動できるようになったためである。

上海の高校では、沖縄からの留学生が多いせいか、沖縄ブームであり、沖縄の空手や伝統芸能、食文化等が各種サークルにて盛んに行なわれている。特に、沖縄の空手や伝統舞踊は、バーチャルリアリティによる3次元立体ディスプレイ表示で、教育者や指導者が沖縄にいながら指導することが可能になっている。さらに、デジタルアーカイブ化された人間国宝、伝承技能者等からの技術も学ぶことができるようになっている。

美来の高校では、沖縄の情報技術高等学校と姉妹校として単位互換があり、美来は2年間留学をし、高校3年生になる来年は、沖縄に戻る予定であり、デジタルアートの大学に進みたいと考えている。

14:00 .....

#### 祖母の陽子は、母の面会。

陽子の母102歳であり、高齢者コンドミニウム施設に入居している。自宅から徒歩で30分位かかるが、よい散歩だと思って陽子はいつも歩いて通っている。沖縄では、20年前に健康長寿の危機が訪れたが、医工連携による医療のIT化が進んだ結果、平均寿命は90歳を越えている。それは、遺伝子情報による健康長寿の分析を行い、20年かけて健康長寿をブランドとして確立することができた。

伊手家は全員、ウェアラブル（身体装着型）端末機器を時計のバンド代わりに使っているが、この端末機器のおかげで、年齢を重ねても安心してどこへでも出かけられる。込み入った街路区域では、道路などに埋設されたセンサが自分の存在を車の運転手に伝えてくれるし、突然倒れるような事態に陥った場合には、緊急医療ネットワークに自動的に通報される仕組みだ。

陽子は、10年前に心臓病を発症したが、昔と違って早期発見が可能となった事、病気の進行を抑制する医療とIT技術の進歩による人工補助心臓、副作用のない個人の体質に合った心臓病改善薬の出現などで、今では普通の健康人と同様の生活が出来るようになっている。

街角にある街路ニュースでは、大学発ベンチャー企業と大手製薬企業が共同研究をしていた再生医療による完全なオーダーメイド型人工心臓の製品化に目途がついたらしい。その人工心臓が世に出れば、自分だけではなく世界中の人々にとって大変な朗報だと陽子は思っている。

ウェアラブル端末機器だが、緊急防犯ネットワークにもつながっていて、先日も近所の小学生が不審な男に連れ去られようとしていた際、アラーム通報に接した地域住民の連係プレーで、警察が駆けつける前に犯人を取り押さえたことがあった。

陽子の母は戦争体験者であり、母が、時々話すことがある、「戦時中は、多くの人が亡

くなり、食べるのも無く、何も無い状態であった。今は、こんなに平和で、安全に安心して、長生きで暮らせる沖縄にいて、自分は幸せだ」。

15:00 .....

勇大が地元の小学校でITを用いた土木建築の授業を行っている。

バーチャルリアリティを用いた教材も使って、生徒たちに体感してもらいながら、沖縄における土木建築技術の素晴らしさを伝えている。最近、生徒たちは保育園・幼稚園の時からこうした授業を受けてきているせいか、目を輝かせて生徒たちが自分の話を聞いてくれるのが、勇大は何より嬉しい。

また、勇大が教えている土木技術は、海洋土木技術であり、コンクリートで埋め立てていた海岸線を元の自然に戻す新たな公共工事である。そのための技術として、大地が開発した海洋GIS技術が活用されている。海洋GISは、海岸線のみならず、さんご礁から海溝のプレート下の海洋資源までデジタル地図化したものである。勇大は、息子が開発した技術を、子供達に授業で教えるということは誇りに思っていた。

ちなみに、レベルは勿論異なるが、同じような話を中学校でもしているが、大企業、中小企業を問わず現役の研究者や技術者が数多く学校の教壇に立っており、勇大はその中の最年長者である。

統計によれば、職種、就業形態は異なるものの、勇大の同世代の約2割が、有償ボランティアとして現役で活躍中らしい。

16:00 .....

陽子は、帰宅途中、秋子から頼まれていた今日の夕食の食材を購入するため、スーパーマーケットに立ち寄る。

買い物は、自宅の端末から発注してスーパーや農家から直接、宅配サービスを受けることもできるのだが、少々割高になるし、世界中の産品が集まるスーパーマーケットを歩いて廻るひとは、陽子にとっての楽しみでもある。

欲しいものを手に取り、ウェアラブル端末を近づければ、生産履歴がチェックできる。生鮮食品の鮮度がわかる鮮度検査器も売り場に設置されている。孫の天人はアレルギー体質だが、アレルギー計測技術に基づいたアレルギーを起こさない食品の製造技術も確立しており、安心して食品を購入できる。

また、支払いは、購入した商品を専用籠に入れ、出口専用ゲートを通過するだけでOK。籠に商品の一覧や合計金額が表示されるので、買い忘れや買い過ぎも一目瞭然。決済は、商品に付いている電子タグ情報を読み取り、オンラインで陽子の口座から引き落とされる仕組みだ。

これにより、一昔前のレジでの大行列は、今では嘘のようである。

今日はまだ使っていないが、デパート等での買い物の際はカードで済ませる。かつてのクレジットカードとは違い、このカード1枚でおよそアジアであれば交通機関の料金支払い、ショッピングなど、すべての支払いが可能である。なお、アジアでは、2025年から共通の通貨を活用しているが、現金そのものを使用することはほとんどない。

この日本発の技術・システムは、国際標準化されているので、アジア以外の海外でも、空港、ホテル、交通機関、その他主だった店舗では使用可能である。昨年、勇大と欧州旅行に出かけた時も、このカード1枚ですべての用が足りた。勇大は、カードだと紛失するからと、携帯端末機器でこのカードの代用をしている。

ちなみに、このカードや携帯端末機器は、他人は使えないようになっているが、これは、暗号技術、個人認証技術の進歩によって実現されているためである

陽子は、今年になってから、まだ一度も現金を見ていない。20年前、財布の中に紙幣、硬貨、多数のカードが詰まっていたのが懐かしきもあるが、今だとあんな財布を持っているだけでいろいろ不安になるなあ、などと思ってしまう。

カードのほかにも、旅行の時に役立つものがある。高度自動翻訳機能を備えたヘッドホンだ。外国語が話せない陽子も、このヘッドホンのおかげで、1人で買い物を思う存分楽しめた。現地の人との交流にも随分と役に立ってくれた。

17:00 .....

仕事部屋でテレワーク勤務を終えた秋子が、ユイと会話をしている。

「掃除は終わった？何か連絡は？お風呂の準備はどうだっけ？」ユイが答えている。「掃除は、ママの仕事部屋以外は終わったよ。おじいちゃんは18時頃帰宅、おばあちゃんは17時頃帰宅とさっき連絡があったから、もうそろそろ帰ってくるんじゃない。お風呂は、18時頃に準備しようと思っているよ。パパは、さっき19時頃に帰ってくるって言ったよ。」

ユイは、人工頭脳技術の進歩により、学習能力が高く、今や普通の日常会話は難なくこなすようになっている。ロボティクスネットワークシステムにより、家庭内の色々な機器（お掃除ロボも含む）、自動車（マイカー）ともつながっており、いわば伊手家の頭脳である。

伊手家の超小型自動車、陽子のウェアラブル端末機器、買い物へ行くとときに付いていく自走式キャリーカートともつながって、移動中の話し相手にもなっている。

ご近所には、家庭用ロボットのリース・サービスを利用しているお宅も多いが、ユイは、思い切って新機種発売の時に買ったものだ。

秋子は、「3人の子どもを育てながら、存分にキャリアを積んでこられたのも、天人が生まれた頃から本格化した家族応援政策推進のお陰だ」と思っている。

当時は、テレワークをしたくても職場のIT投資は道半ばで、自前のPCを使っていた。セキュリティ上の不安もあって、自宅から職場のデータを利用することは許されていなかった。労働時間のカウントができないという理由で、先代の社長は社員の自宅勤務に難色を示していたものだった。しかし、美来を出産する頃には、成果主義の労働評価方法も確立し、個人認証システムやセキュアなネット環境も構築されていたから、育児休業中も会社の最新情報をカバーできたし、美来が昼寝をしている時間帯には、仕事に参加して育児休業給付以外にお小遣いを稼ぐこともできた。

現在の伊手家は200平米の一戸建てだが、子どもたちが小さい頃は、2,000世帯が入居するタワー型コンドミニアムで生活していた。

政府が「コンパクトシティ化」を進めた頃で、一定規模の集合住宅群には、託児施設、医療機関、学校などの設置が義務付けられ、子どもたちの通学途中の事故を心配することもなかった。

高層ビルが増えたものの、通水性が高く植物が育つコンクリート等を活用して緑が多い快適な都市空間が実現している。美来が小学生だった頃には、タワー型 condominium 内の共有スペースで田植えを経験させてやることもできた。

ディベロッパーが都心部で新たな開発権（クレジット）を得るには、緑地整備が義務付けられるようになったので、秋子の子ども時代よりも緑地面積は増えたほどだ。

18:00 .....

大地が帰宅しようとしていると、若手研究者が出勤してきた。

彼女は、最近子どもが生まれたばかりで、夫と交替で子どもの世話をしながら働いている。テレワーク制度とフレックスタイム制度をうまく活用して、仕事と家事の両立を図っている。

また、大地の会社では、プロ意識を持ってもらうために、社員全員に年俸制を導入している。勤務時間や勤続年数を重視するのではなく、「人間力」を重視し、何に挑戦しどんな結果になったのかを評価する仕組みを導入している。

イノベティブな仕事には欠かせない柔軟な発想には、仕事以外のことや家族と過ごす時間も大切だ。大地も、急ぎの仕事がなければ早く帰って、家族との団欒を楽しむようにしている。

19:00 .....

一家5人で夕食。

夕食の仕度は、陽子、秋子、大地の当番制になっており、陽子は新しい洋風料理が得意であり、秋子は伝統的な沖縄料理を得意としている。今日は、大地の手料理の当番であるが、栄養バランスを考慮して、帰宅途中に携帯フレキシブル・ディスプレイに映し出されるオーダーメイド型健康食品を配達にて注文を行なった。

天人が「ロボットが月旅行に成功！」というニュースを見て、慌てて103インチディスプレイを操作して、このニュースを表示する。

ロボットが行った観測作業の映像が、画面に鮮明に映し出される。青くて美しい地球が輝いて見える。いつまでも、美しい地球であってほしいものだ。天人は「自分も宇宙旅行に行って、地球をこの目でみてみたい」と思った。

20:00 .....

上海の美来から連絡が入る。

天人が多機能携帯端末機器のパネルを操作すると、壁掛け103インチディスプレイに元気な美来の姿が映し出された。沖縄では、日本国内の国際海底ケーブルの4割が陸上げされていた地理的立地条件から、アジアと米国を結ぶ大容量高速情報交差点とされており、中国からの映像もリアルタイムでハイクオリティ映像を見ることができる。

美来の周りには、高校のクラスメートらしき男女の若者達が数人、楽しそうに中国語でおしゃべりしている。中国人の友人達が、それぞれ中国語で美来の家族に話しかけてきた。ディスプレイ上に日本語字幕が表示されるとともに、日本語同時通訳の音声も流れている。この自動翻訳機能は、携帯端末機器にも備わっていて、昨年欧州旅行の際にも大活躍だった。

友人の1人、チェン君の実家は、中国内陸部で農業を営んでいるとの事。かつては広大な砂漠地帯で、農作物などできなかったが、日本のバイオテクノロジー（遺伝子組み換え食物の安全性評価も含む）とITファームのおかげで、砂漠緑化も進みつつあるし、耐砂漠性農作物も作れ、遠隔にて広大な農場を管理できるようになったとの事である。

ちなみに、同地域の生活用・灌漑用・農業用等すべての電力は、日本と中国の合弁企業による太陽光発電によってまかなわれている。現在、さらにこの発電規模を大きくして、超電導ケーブルによる中国沿岸部都市地域への一大送電計画が進行中らしい。

チェン君は、誇らしげに地元の話をしながらか、自分も大学卒業後はエネルギー関係の仕事に従事し、中国を日本のような環境保全と経済発展が調和した国にしたいと、夢を語ってくれた。

チェン君は、美來の話から興味を持ったデジタルアーカイブ化された沖縄の文化・芸能、沖縄発のアニメーションを通して、沖縄のことをよく知っているようである。

23:00 .....

それぞれ就寝の床につく。

居間や寝室は、微生物による人に癒しを与える壁面照明となっており、人の存在の有無、活動状況等によって明るさは自動調節されている。

照明に限らず、家庭内でのエネルギー使用に関しては、国際標準化となる世界最高レベルの省エネルギーシステムが導入されており、都市部での大規模省エネルギーシステムの導入と合わせて、国民1人当たりの民生用エネルギー消費は、20年前の半分以下まで下がってきている、との事である。

さらに、沖縄では、アジアのエコアイランドの中心として、世界レベルでも、太陽エネルギー、風力及び波圧等の新エネルギーの普及、省エネルギーの進展、その他諸々の取組によって大気中の二酸化炭素の増加はストップしている。

眠りにつく前、大地は、公務員時代に携わった「沖縄e-island宣言」を思い出していた。宣言の中では、「私たちは新たな時代を切り開く先駆者として、先端分野を積極的に開拓し、すべての分野にITを活かして、ひと、もの、情報が行き交う沖縄、世界を舞台に活躍する平和で豊かな沖縄を実現します。この島に生まれるものには輝く歓びを、学ぶものには未来を切り開く力を、働くものには希望と誇りを、暮らすものには健康と長寿を、訪れるものにはやすらぎを、羽ばたくものには限りない未来を、私たちは沖縄が国際社会に貢献することを願い、世界と共生するe-islandを目指します」という言葉がある。

20年という時代の流れの中で、沖縄は、情報通信関連の発展と共に、日本だけでなくアジア、そして世界と共生する環境が構築されたのであった。